

馬場孤蝶

本所横網

本所横網

一

南風が稍^{やや}大粒な雨を吹き付けて、大川の面には可なり高い浪が立って居る。百本杭は最早とくに影も無くなつて了って、電燈会社の徒に長い板塀が続いて居るのを左にして行くと、右の家並が何か大きな手斧のようなものででも一打に切り取られて了ったかのように、町が広くなつて居る。十三四年前は此処に交番があつたのだ。此

所に両国の停車場の正面の路へ出る横町、寧ろ路次がある。斎藤緑雨の死んだ家は此の横町の中程の右側で、たしか横網町一丁目十七番地であつた。

緑雨の弔問客が交番で番地だけ尋ねると、査公は「あ、緑雨先生のお宅ですか」と云つて、教えて呉れたと云うのだ。

二

その家は未だ存して居るように思う。この辺りが一体

に明るくなつたように思われるのは僕の気からのみではなからう。僕は緑雨の事を追想しながら川岸を厩橋まで歩いた。

緑雨が本郷の千駄木町から横網へ引越したのは三十六年の十一月頃だと思ふのだが、暫時世間から離れて暮し度いと云うので、誰にも居所を云つて呉れるなという頼みであつた。自分でも可なり秘して居たものと見えて、尾崎紅葉氏が死んだ時にも住所を書かない弔問状を送つたのであつたというのだ。

緑雨が死んでから、諸雑誌に出た緑雨追憶談には大抵

その談話者が緑雨の病中を見舞はないということ云つて居た。某雑誌の六号子は「緑雨の追憶談で見ると、馬場孤蝶を除いては、誰も皆緑雨の病中を見舞つて居ない、どうも不人情な奴等ばかりでは無いか」というようなことを書いた。此の非難は全く無理だ。前に云つた通り、緑雨は住所を誰にも告げなかつた。誰にも病状を知らせなかつた。緑雨は、二十七八年頃にさえ肺患で危篤だと云われた程であるのに、その後一行に重体とさえ云われたことは無かつたのであるから、誰も緑雨を見ること殆ど健康体を以てするようになって居たのだ。だから、重

体だと云うような噂でも無い限りは、可なり親しかった人々でも、見舞には行かないのが当然である。

馬場孤蝶即ち僕には、緑雨は少し用があつた。その一つは、一葉の日記を出版したものだろうかどうだろうかという相談であつたのだ。千駄木に居る時分に、樋口家から日記を預つて、鷗外氏や露伴氏とも相談したことがあるのだ。緑雨は彼あの日記を出版することには余り賛成でなかつた。勿論、その当時の文壇は自然主義勃興以前の文壇である。当時の文壇の気分は、彼の日記の全部の公表を許す底のもので無かつたことは明白である。尚そ

の外に緑雨自身の或る感情も加わって居たのではなからうかと今では考えられる理由がある。

緑雨は一葉からは可なり尊敬を表されて居たと信じて居たらしい。しかるに、日記の文面だけで見ると、必ずしもそうで無いように見られる。これが緑雨に取っては少し辛いことであつたろう。その次ぎには、日記には、『めざまし草』の連中が一葉に加盟を求めた時に、緑雨が陰でそれを妨害したことが、明白に書いてある。で、それが公表されるのは、緑雨は少し困るのであるらしいか。つた。緑雨は、日記の公表には余程躊躇する理由を――

例えば、故人の価値を損ずるようになるというようなことを——説明するのみで、僕には日記の一部しきや見せなかつたが——或る時——千駄木でのことだが——「三木竹がめざまし草へ一葉に加盟して貰いに行ったことがあるんだが、それを僕が後へ廻ってぶち毀して了った。それが日記にあるんだから其所を森（鷗外氏のこと）に見せるのは、少し困るがね」と、緑雨はニヤニヤ笑いながら云ったことがある。

要するに、緑雨は彼の^あ日記を公表するのならば余程削った上で無ければという意見であつたのだ。作家は自分

の私生活を余り人に知らせたくないと思つて居た時分であつた。緑雨などは殊にそういう気分が強かつたように思うのだ。

そういう訳で、樋口家とも種々交渉する必要はあり、その仲人に僕を使うのが都合が好かつたので、緑雨は僕には住所も知らせ、病氣の模様も通知して来たのであつたのだ。勿論、僕と最後まで音信を断たなかつたのは、そういう功利的な理由からのみだといふのは、緑雨を余り利己的な人間に見過ることになるだろうが、よしその外に友情的の理由があつたにしても、直接の理由は前掲

の用事が重なるものであったことは殆ど疑いを容れないと思う。

だから、緑雨の最後の病状を見舞わなかった緑雨の友人諸君が不人情であったのでもなく、僕が緑雨の病中に度々緑雨の宅へ行ったのも僕のみが特に友情が厚かったという証拠には少しもならないのだ。

三

僕はその頃は飯田町五丁目に住んで居て、日本銀行に勤めて居た。

三十七年の四月の十一日頃かと思うのだが、最早誰たそ彼がれ時に近かったが、横網の齋藤からだと云って使が来た。「齋藤が今夜にも危ないので、後々のことも聞いて置いて頂き度いから、直ぐおいでを願ひ度くって上りました」と、その使だという人——確それは緑雨の妹婿の中村氏であつたと思う——が、云うのであつた。

一月の末か、二月の始であつたか、緑雨から、「咳嗽がいそうがどうしても止まらぬ。万方施すに由無き有様に立ち至つたことを承知して居て呉れ」というような意味の消息があつた。僕は直ちに行つて見た。

緑雨の住居は元誰かの隠居所であつた家の一部——東の部分——を仕切つたものだといふのであつたが、水口に並んだ格子戸を入ると、取り附きが二畳、その後は壁で、左が四畳半位の茶の間、その奥六畳に緑雨が臥ねて居るのであつた。横網へ行つてからは直きに寒くなつたので、緑雨は臥床勝であつたように思ふのだ。

その六畳の東は壁であつて、その壁の中央どころに柱が出て居るのであつたが、見ると、その柱に「烟草を飲んで呉れるな」というような意味を書いた紙が張つてある。僕は烟草を遠慮して、話を始めた。緑雨は、「君、かまわんから烟草を飲んで呉れ給え、此の間、亜米利加烟草を飲まれて、その臭に閉口して、斯うしてあるんだから」と、云つた。が、僕は烟草を飲まずに話を続けた。その時の話しは、何うも病気が重いようなので、十分養生してみたいと思う。就ては、朝日の村山氏と、大橋新太郎氏とから、金を借りるようにしたい、それは、僕の

従兄の野崎左文に頼んで口をきいて貰ってくれというのであつた。

で、野崎に頼んで、その件で奔走して貰って居たので、その後一二回緑雨を見舞つたのみで、半月程は無沙汰になつて居たのではあるが、今危篤ときくのは甚く意外な気がした。

四

春の薄暮は何と無く哀愁の懐おもいのするものである。僕

は路を急いだ。未だ両国橋の架け変らぬ時分であつた。

吾々の家にはまだ電燈の無い時分の事である。部屋の光景は何となく悽愴の気を帯びて居た。死の床には一種肅殺たる威厳がある。

緑雨は気分はまだ確であつた。何か少し言い掛けて、家人を呼んで、如何にも苦しそうな咽喉を絞られるような声で、「咽喉が苦しい」と云つた。緑雨の晩年に同棲した金沢竹女たけじよが猪口に水を入れて持って来た。緑雨はそれで咽喉うづらおを沾うるした。僕は、「管で飲んだ方が楽ではないか」と注意してみた。緑雨は、竹女に硝子の管を持って

来させて、それで猪口の水を飲みながら、話をした。「医者
者の云うのでは、今夜から注射するのだが、それも一二
回で利かなくなつて、それ切りだと云うのだ。君には種々
お世話になつたが、最早いよいよ此れでお別れだ」と、
云つて、竹女に指図して、手文庫を持って来さして、中
から一葉の日記を紙紉こよりで纏めて縛つてあるのを出させ
て、「此れも何うにかする積りであつたのだが、最早斯
うなつては何うにもしようがない。樋口へ返してくれ給
え。此の事を頼もうと思つて君に来て貰つたのだ」と、
落着いた低い声で言つた。

緑雨の平生は、その態度にも言葉附にも一種の気魄が満ちて居た。が、此の時は、平生の威儀は少しも失われずには居なかつたが、さすがに、声は全く思い諦めたような寂しい調子があつた。僕は、「宜しい。承知した」と云つたのみで、その他には何とも云うべき言葉がなかつたので、黙つて居た。さまざまな懐の一世界を含んだ沈黙である。

緑雨は重ねて云つた、「もう一つ頼みがある。君一寸筆を執つてくれ給え」と云うのだ。僕は緑雨の枕もとにあつた筆と紙とを取つた。緑雨は「幸徳（秋水氏のこと

である）へ使いをやってあるのだが、間に合わんといけないから書いて置いてくれ給え」と云つて、やがて、
 「緑雨斎藤賢まさる本日日出度く死去致候、此段謹告仕候也。年月日」

という広告の文案を口授して、「それへ黒框だ」と云つた。僕が書き終つて、その紙を渡すと、緑雨は礼を云つて、蒲団の下へそれをしまった。が、少し経つと、又、「もう一枚書いて持って居てくれ給え、で、幸徳の来ようが遅いようだったら、君がそれを持って行って、新聞の広告をしてくれ給え。新聞は読売に万朝に朝日位で宜

いから」と云うので、僕はもう一枚書いて、自分の懐へ入れた。

そのうちに、緑雨は斯う云った、「何時まで居てくれても名残は尽きない。が、僕は最早緑雨醒客でなく唯の斎藤賢で死に度いのだ。文筆の士が枕上に居られると反って、心残りがあつていけない。もうどうぞこれで帰ってくれ給え」僕は唯、「君の言葉に任せてそれでは今夜はこれで帰ろう」と云い得たのみであつた。

が、少時立ち兼ねて居た。緑雨は台所の方を見るようにして、「君が帰った後で裏屋の葬式の相談をするんだ」

と云った。その声は、如何にも静な悲しく聞なさるる調子であった。

僕はやがて、「それでは、余り気を使わないで、静に眠るようにし給え。用があれば何時でも呼びによこしてくれたまえ」と、云って、座を立った。

翌日は、夕方銀行の帰りに、見舞ったが、「お目にはかかりたいが、お目にかかったところで苦しんで居るところをお目にかけるのみだから、此のままのお別れにしたいと、病人が申しますから」と、竹女が云ったので、逢わずに帰った。

その又翌日の十三日の午前十時頃、野崎左文から、日本銀行に出て居た僕のところへ電話で「斎藤君が先き程死ました。私は今行き合したので、知らせます」と、云つて来た。

緑雨の終焉は極静かであつた。一寸眠るから、少し彼方へ行つて居てくれと云うので、人々は台所へ行つて居たが、少し経つて来てみると、最早息が絶えて居たといふのだ。

雨を含んだ春の朝の明けたばかりの時分、緑雨の棺は駕籠に入れられて、横網の横町を出た。棺に従う者は二三近親の人々と、露伴氏と与謝野氏と僕とであつたと思ふ。

大川の面には霧が下りて居て、岸の柳の緑が殊に艶やかに見える。物皆和かに見える朝景色である。いとどしく寂しく、黒く見える駕籠は、大川沿いを厩橋へと向つて行く。

やがて、長い橋を越え、電車道を横切って、黒船町を直行する。北富坂町あたりであつたらうか、露伴氏が「緑雨君の戒名は、緑雨醒客をその儘取って、春暁院緑雨醒客として、居士とも何とも付けないのは何うでしょうか？」と、云つた。吾々は緑雨が最も敬服して居た露伴氏に、緑雨の戒名を付けることを、前日から頼んで置いたのであつた。

緑雨の自ら記するところ——『みだれ箱』の中かと思ふ——に抛れば、緑雨は雅号を坂崎紫瀾氏に撰んで貰つたのであるが、紫瀾氏は紅露情禅というのと緑雨醒客と

いうのを撰んだ。が、前者は当時既に知名の作家になつて居た紅葉露伴二氏の号を一字ずつ借りるような形になるといふので、後者の方を採ることにしたといふのだ。

緑雨は、生れは伊勢であるが育つたのは、本所緑町であつたので、此の雅号は、それにも因むのであつた。緑雨とは若葉の雨だといふのだ。

それは夏、これは春であるけれども、露伴氏の付けてくれた院号が、折からの朝景色に思い寄せられて、如何にも善く箝はまったものと思われた。吾々は、「結構です、それに極めましょう」と、答えた。露伴氏は、「生憎そくじ仄字

ばかりで少し面白くないとは思いますが、何うも他に善い考えが無いものですから」と、云った。

直きに、吾々は、えいきゆうちよう栄久町——彼のどぶ大溝の流れている町——へと右へ曲った。

それからは、何ういう路を通ったのであるか、今はさらに記憶して居ない。日暮里の火葬場には、野崎氏、伊原青々園氏、堀内新泉氏その他の人々が待ち受けて居た。棺は無雑作にひや火屋の中へ入れられて、黒い——物凄い程黒く思われた——扉が閉まった。

斯ういう風に、先ず密やかに茶毘に付せよというのが、

緑雨の遺言であつたのであろう。緑雨は本葬はしないで宜いとまで言つたように聞いて居る。

緑雨が伯母さんと云つて居た若江氏の内儀の話では、緑雨は遺言をしてしようと、最早これで此世に何も用は無いのだから、棺を買つて来て、その中へ入れてくれと、度々云つて、困つたと、いふのである。

緑雨が危篤に陥るといふと、医者は、「この人は貴君方と違つて学者なんだから、死ぬるといふことを当人に知らせて、誰かに遺言でも聞かせて置かぬと、後で困ることになるかもしれない」と、付き添つて居た人々に云

ったが、誰も進んで、緑雨にそう云おうという人がない。で、到頭この伯母さんが緑雨に助からぬということをつたつたといふのである。伯母さんは仏教の信者で、身体が肥つた、その時最早五十に近い位に見える人であつた。

緑雨の本葬——埋骨式と称えたと思う——は、間もなく本郷東片町の大円寺で行つた。知友は大抵皆会葬した。遺骨は、同寺内の先塋せんえいに納めた。斎藤家の宗旨は曹洞宗である。

日本文学電子図書館

本所横網

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館